

幼児期の社会化に関する母親の発達期待

水谷孝子

(武庫川女子大学文学部教育学科)

Mothers' Developmental Expectation for Child Socialization.

Takako Mizutani

Department of Education,

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

This study is designed to examine the characteristics of mothers' developmental expectation for child socialization. Referring to Azuma et al (1981), the present author analyzed the intensity of mothers' developmental expectation, in addition to age to make child acquire some social behaviors.

Subjects are 268 mothers of 3, 4 and 5-year-olds in a kindergarden and the 2nd and the 5th grade in an elementary school. The questionnaires was administered to mothers.

This study found out that Japanese mothers' developmental expectation was similar to American mothers' one in 1974, and EMOTIONAL MATURITY, INDEPENDENCE, SOCIAL SKILL, and VERBAL ASSERTION were expected still to be more later than the other data. The older the child age is, the lower the marks of mothers' developmental expectation are. However, as for the intensity of it, there is no difference among all categories, and mothers' developmental expectation becomes strong again in the 5th grade. This change suggests that it is the stage of the second aspect of child socialization. After learning the model type-cultural transmission-, they start to find their own ways to obtain approval in their society-individual learning-. Watching their trials, mothers have more concern and expectation. Mothers' developmental expectation has characteristic variety according to child age, gender and fraternal order. It suggests that these variations are closely concerned with the child development of socialization and the social interaction between parents and children.

緒言

1920年代、社会化とは、粗野で不作法な人間の本性を社会的なものに変えていくこと、すなわち広義の訓練 (training) のプロセスと考えられていた。1940年前後から、周囲の人々との社会的相互作用 (social interaction) によって、その社会のメンバーとしてふさわしい方向へと行動を変化させ、社会的存在になっていくプロセスをさすようになり、さらに、1950年頃からは、個人の自発性や積極性が強調されるようになり、社会化は、社会的学習 (social learning) として考えられるようになってきた (斎藤ら 1990)。社会化は、広い意味での訓練による『文化的伝達』という側面と、社会的相互作用を通して行動変化をなしとげていく『個人的学習』という側面を合わせ持っているものといえる。

さて、社会化は、生涯のそれぞれの段階における社会的期待を反映している。すなわち、基本的な生活習慣の習得を目的とした身の回りのしつけに始まって、仲間との遊びや生活を通しての対人関係を調整する能力の形成、若者集団への加入とそれを通しての地域社会への参加、生計を立てるための職業的技能を身につけることを目指した訓練、家庭を代表して地域社会とのつきあいに出席することなど、それぞれのライフステージにおける社会

化が考えられる。T. G. R. Bower(1989)は、生後1週間にもならない新生児に見られる模倣(随伴性の発見)や、生後6~8週間の赤ん坊の社会的微笑、生後12ヵ月くらいの赤ん坊に見られる性の識別(Gender identity)等を、社会性の発達という観点からとらえている。そして、文化的要因やおとなの期待がそれらを決定づけるのに重要な要素となっていると述べている。社会化は生後まもなくから始まっているといっても過言ではないのである。

本研究においては、身近な生活環境が大きく拡大し、家族以外の人とのかかわりが著しく深まる、幼児期の社会化について考えていく。

幼児期の社会化は、まわりの大人たち、とりわけ母親が、何を価値あることとし、何を適応的な行動と考えているか、言い換えれば、何を社会的規範と考えているかということに大きな影響を受ける。そして、そのことは、人格形成や精神発達とも深い関連を持ってくる。特定の社会の中での発達の基準と人間形成への期待、すなわち『発達期待』は、子どもの社会化を考える上で極めて重要なことなのである。

日米の母親の発達期待について、東ら(1981)は、どのような側面の発達をより早期に期待するかに関して著しい日米差が見られ、日本では情緒的成熟や大人への従順、礼儀などが、米国では言語による自己主張や友達関係での社会的スキルが、それぞれ他方の国より有意に早期の発達期待が持たれている、ということ指摘した。そして、この差は、日本ではおとなしく温和であることが、米国では社会性を持ち自己を主張することが、それぞれ「よい子」とされている文化的背景を反映しているものだろうと述べている。

平成2年4月より、新幼稚園教育要領、新保育所保育指針が施行された。そこには、身近な環境や友達に積極的にかかわる力を育てるために社会生活における望ましい習慣や態度を身につけることや、自分の気持ち、経験したこと、考えたことを話そうとすることが、ねらいとしてあげられている。これらのことは、従来より保育指導にあたって大切に考えられてきていることでもあり、幼児を持つ親の願いとしても果たして「おとなしく、温和な子ども」を望ましい幼児像と考えているのかは、疑問である。

東ら(1981)が発達期待の側面としてあげた7つのカテゴリーと各項目は、幼児の身近な社会生活に必要な資質、能力、技能等を幅広くとらえており、幼児期の社会化を検討する上で適切な指標となると思われる。

本研究では、今日の子どもの社会化に関する親の意識(発達期待)がどのような特徴を持っているのかを、子どもの年齢や性別、出生順位などとの関係について検討し、東ら(1981)の研究データと比較して、日本の母親の発達期待の変化について分析する。また、何歳までに身につけさせたいかという期待年齢と共に、そのことをどれほど重要に考えているかという、期待の強さ(重要度)についても分析し、考察を行う。

方 法

1. 対象：調査対象となったのは、京都市内のA幼稚園3・4・5歳児クラスとB小学校2・5年生の母親である。

対象者数及び母親の年齢は、Table1.に示す通りである。

計306名中、268名の回答を得、回収率は87.6%であった。

Table 1. Subjects

Group	Age		Number
	Range	Mean	
Mothers of Girls in 3-year-olds	28-43	34.5	8
Mothers of Boys in 3-year-olds	32-43	32.7	10
Mothers of Girls in 4-year-olds	28-42	32.9	29
Mothers of Boys in 4-year-olds	29-45	34.1	22
Mothers of Girls in 5-year-olds	29-44	36.4	28
Mothers of Boys in 5-year-olds	25-45	35.8	25
Mothers of Girls in the 2nd grade	32-44	38.0	38
Mothers of Boys in the 2nd grade	29-46	37.2	37
Mothers of Girls in the 5th grade	32-48	39.8	36
Mothers of Boys in the 5th grade	34-45	39.2	35

Total

268

幼児期の社会化に関する母親の発達期待

2. 手続き: 質問紙を各幼稚園, 小学校の対象クラス全員に配付し, 2週間後に回収した。
調査時期は1991年6~7月である。それらの項目は, Table 2.に示す通りである。
7カテゴリー, 計34項目について, 以下の2点をそれぞれたずねた。

- Q1. 「いつ頃までにできるようになってほしいか」
できるようになってほしいと思われる年齢を記入してもらおう。
- Q2. 「どのくらい重要か」
どうしてもできないと困るといものに☆,
ぜひできてほしいが, どうしてもというほどではないものに◎,
どちらかと言えば, できたほうがよいものには○,
できなくてもあまり気にならないものには△,
として, 各項目に記入してもらった。

Table 2. The categories of developmental expectation and each item for the questionnaire.

Category	No.	Item
学校関係スキル: (SR)	34.	30ページぐらいの絵の多い童話を一人で読み通せる。
	37.	時計がよめる (15分単位ぐらいまで。)
	41.	興味のあることを図鑑や事典でしらべる。
従順 (C):	6.	呼ばれたらすぐ返事をする。またはすぐ来る。
	13.	おもしろい本やテレビを見ているのに, お母さんの手伝いを頼まれた時, すぐやめて手伝う。
	20.	悪いことをして注意されたら, すぐやめる。
	26.	いいつけられた仕事は, すぐにする。
	36.	親からいけないと言われたら, なぜなのかわからなくても言うことをきく。
礼儀 (P):	3.	おとなに何かたのむとき, ていねいな言い方をする。
	10.	朝, 家族に「おはよう」とあいさつする。
	28.	テーブルなどに足をのせたり, 足で動かしたりしない。
情緒的成熟 (E):	4.	やたらに泣かない。
	24.	欲求不満になった時でも泣かずにがまんできる。
	29.	いつまでも怒っていないで, 自分で機嫌を直す。
	39.	赤ちゃんことばは使わなくなる。
自立 (I):	1.	おとなに手伝ってもらわずに一人で食事ができる。
	2.	お小遣いを大事にちゃんと使える。
	8.	自分の脱いだ服を始末できる。
	9.	外に一人で遊びにゆける。
	15.	きまったお手伝いができる。
	16.	一人遊びができる。
	22.	一人で電話がかけられる。
	27.	1時間ぐらい, 一人で留守番ができる。
社会的スキル (S):	5.	自分のおもちゃを友達に貸してあげて, 一緒に遊べる。
	12.	友達を説得して, 自分の考え, したい事を通すことができる。
	19.	友達と考えが合わない時, けんかをせずに適当な解決をつけられる。
	30.	友達と遊ぶ時, リーダーシップがとれる。
	35.	ゲームをしている時, 自分の番まで待てる。
	38.	友達の気持ちに思いやりをもつ。
言語による自己主張: (VA)	7.	納得がいけない場合は説明を求める。
	14.	意見や希望をきかれたら, はっきり述べる。
	21.	質問されたら, はきはき答える。
	25.	自分の考えを他の人達にちゃんと主張できる。
	40.	自分の考えや, その理由を, 他の人がわかるように説明できる。

結果と考察

1. 東ら(1981)に示された、1974年の日米のデータとの比較

東ら(1981)と同様に、期待年齢を、6歳以上を1点、4~5歳を2点、3歳以下を3点として分析すると、Fig.1.のようになった。なお、東ら(1981)の1974年のデータが4歳8ヵ月の子どもの母親(以下、親と記す)を対象に行ったのに対し、本研究のデータは3歳児(3歳6ヵ月~4歳7ヵ月)の子どもの親を対象に行った。

1974年のデータにおいて、日本の親の意識の特徴としてあげられていた「従順」、「礼儀」に関する期待は、今回のデータでは低くなっており、1974年の米国の結果に近づいている。さらに、「情緒的成熟」や「自立」に関する期待は、米国の結果以上に低くなっているのが分かる。他方、日本のもう一つの特徴とされた「社会的スキル」や「言語による自己主張」に関する期待の低さは一層顕著となった。

日本の家族の形態は、この20年間に大きく方向転換をしたといわれる。昭和50年(1975年)をピークとして、夫婦と子どもの核家族が減り始め、逆に夫婦のみの世帯や、母子・父子世帯、単独世帯が増加してきている。「子どもは授かる」時代ではなく、「子どもを作る」時代といわれるようになって久しい。そして、少ない子どもを手塩にかけて育て上げるという思いも強く、岡崎(1990)は、「家庭生活は子ども中心に考えるべき」と言う人が56%、「夫婦中心」が42%であり、また、子どもを産み育てることの意味として、タイでは「家の存続」が69.8%、イギリスでは「子育ては楽しみ」が70.7%であるのに対し、日本は「次の社会を担う世代を作る」が61.7%であると述べている。ここにも、日本の親が子どもの社会化に対して非常に強い意識をもっていることがうかがえる。

臼井(1991)は、「子どもに身につけてほしい大切なこと」の調査結果から、日本の親の特徴について述べている。アメリカの親が、「自主性」や「異なった意見に対する寛容さ」を大切に考えているのに対し、日本の親は「基本的生活習慣」や、「他人に迷惑をかけずにルールを守る」、「根気強さ」を挙げているのである。このように調和的な人間関係を作るということを最重要に考えるのは、日本文化、日本社会が、人に対する配慮を重視する『気持ち主義』とも言える特徴を持っていることを表している。親との同一化的共生関係を基盤として、徐々に同一化の対象を広げ、対象の期待を自己のものにしていく中で社会化を進めていく、という考え方である(田島1993)。本研究において、「従順さ」、「礼儀」、「情緒的成熟」への期待が高いのもうなづけることである。

また、「情緒的成熟」への期待については、 $t=4.10(df=74)$ で0.1%水準で、「自立」への期待についても、 $t=4.13(df=73)$ で0.1%水準で、本研究の1991年のデータの方が有意に低かった。全体的にも、この17年間に親の発達期待はずいぶん低くなっているのが分かった。

2. 子どもの年齢と親の発達期待

さらに、「できるようにするのは10歳以上」と回答したものを0点として分析すると、Fig.2.のような結果となった。つまり、3歳児の親の期待得点が最も高く、ついで2年生、5年生の親と、期待得点は低くなっていく。「礼儀」への期待について、3歳児の親は、 $t=2.40(df=89)$ で、5%水準で2年生の親よりも有意に高く、 $t=3.27(df=83)$ で、1%水準で5年生の親よりも有意に高かった。「情緒的成熟」では、5年生の親は、 $t=2.78(df=134)$ で1%水準で2年生の親よりも有意に低く、 $t=3.27(df=83)$ で1%水準で3歳児の親よりも有意に低かった。つまり、3歳児の親は「礼儀」や「情緒的成熟」を4歳までに身につけさせたいと考え、2年生・5年生の親は、4-5歳になってから、と考える人が多いことを示している。また、「社会的スキル」への期待についても3歳児の親の期待は、2年生の親よりも、 $t=3.09(df=83)$ で、1%水準で有意に高く、5年生の親よりも、 $t=3.77(df=79)$ で0.1%水準で、有意に高かった。さらに、「言語による自己主張」への期待についても、3歳児の親は5年生の親よりも、 $t=2.71(df=83)$ で、1%水準で有意に高かった。

この「礼儀」や「情緒的成熟」への期待が高いのは日本文化の特徴としても、「自立」や「社会的スキル」、「言語による自己主張」を、幼児期(4-5歳児期)に身につけさせたいと考える親が少ないのはなぜなのだろう。幼児期の社会化を考える場合、これらの項目は大変重要な意味を持っていると考えられる。そこで、親はこれらの項目をどれほど重要と考えているのかについて分析を行った。結果は、Fig.3.に示す通りである。

「どうしてもできないと困る」と回答した親は、各カテゴリー共、30~40%を占め、ここでは期待年齢に見られたようなカテゴリー間の差は見られない。しかし、やはり「礼儀」への期待がここでも高い事が分かる。つま

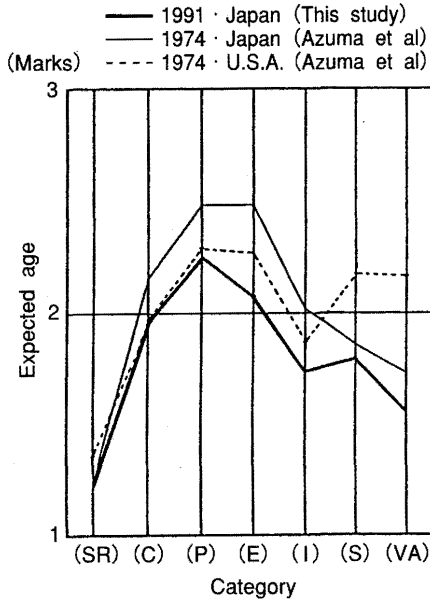


Fig. 1. Expected age comparing Azuma et al (1981)

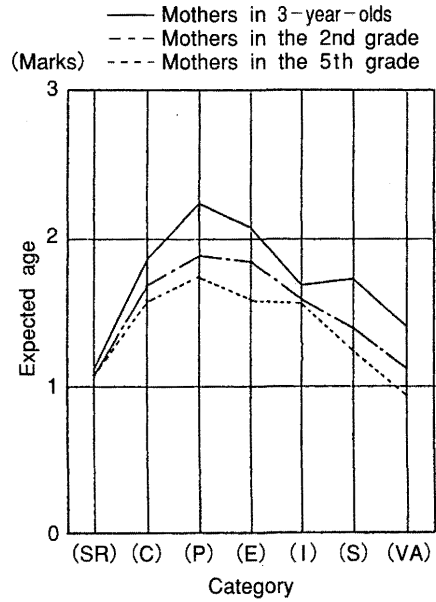


Fig. 2. Mothers' developmental expectation with age.

り、ぜひ身につけさせたいと考える親の比率は、「自立」「社会的スキル」「言語による自己主張」に対しても他のカテゴリーと変わらないが、それをいつ頃までに身につけさせたいかという点では、4・5歳を過ぎてからと考えている親が、他のカテゴリーに比べて多いのである。

重要度に関しては、カテゴリー間よりもむしろ、子どもの年齢間に差がみられた。いずれのカテゴリーについても2年生の親の期待が低くなっている。「学校スキル」については、3歳児の親よりも、 $\chi^2=5.22(df=1)$ で5%水準で低く、5年生の親よりも、 $\chi^2=12.69(df=1)$ で0.1%水準で、有意に低かった。「自立」については、 $\chi^2=23.08(df=1)$ で0.1%水準で、「言語による自己主張」については、 $\chi^2=7.66(df=1)$ で1%水準で、2年生の親は5年生の親よりも有意に低かった。その他、「情緒的成熟」について5年生の親との間に、「従順」「礼儀」「情緒的成熟」について3歳児の親との間に、5%水準の有意な差が見られた。

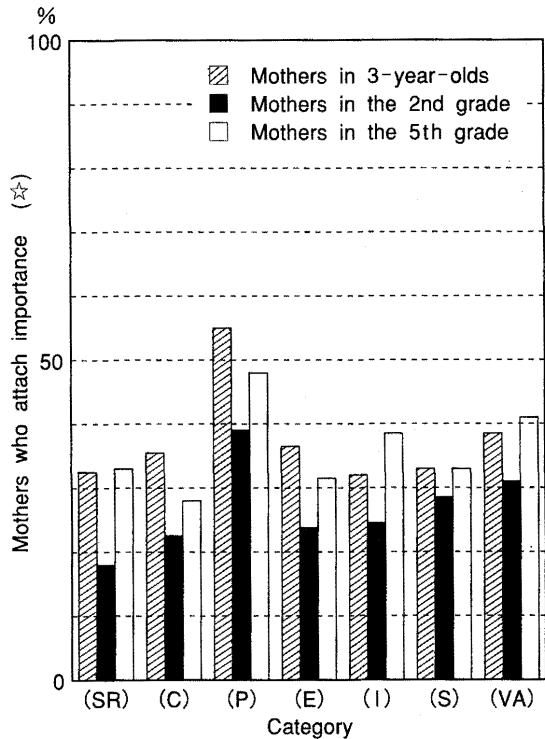


Fig. 3. The intensity of Mothers' developmental expectation.

小学校2年生といえば、一応のしつけの終了期を迎え、仲間の一人としてふさわしい行動がとれるようになり、社会化を果たしたかのように思われる時期なのであろう。しかし、高学年に進むにつれて、再び「社会化」という問題が親にも、そして子どもたちにも重要な課題として意識されるのであろう。このことは、「社会化」とは、単なる社会への適応性、すなわち他者や社会に対して適応的な、時には要求を受け入れるだけの、『文化的伝達』の側面だけではないことを示すものではないだろうか。つまり、その子どもが属している集団の基準、すなわち社会的規範を教え込む「しつけ」と考えていた乳幼児期に対し、やがて、自己の成長や可能性の実現を目指して自分の要求を積極的・肯定的にとらえ、他者あるいは社会が認めてくれる形で通すにはどうしたらよいか、その方法を子ども自身が探り出していくようになる(岡本1994)。このように、自分自身で問題解決に向かおうとすること、その子ども特有の行動の型を身につけていくことこそが、『個人的学習』としての社会化を完成させることであり、子ども自身の自我と心の成長につながっていく大切な体験なのである。このことが、各カテゴリーにおいて、小学校高学年に向けてのV字型変化として表れているのではないだろうか。

3. 子どもの性別と親の発達期待

Fig. 4.に示す通り、全体的にみると、3歳児の親と5年生の親では、男児よりも女児への期待が高いが、3歳児の親の「学校スキル」については、 $t=2.13(df=17)$ で5%水準で男児への期待が高かった。また、4歳児、5歳児、2年生の親は、女児よりも男児への期待が高く、特に、4歳児の親は「社会的スキル」について、 $t=2.44(df=49)$ で2%水準で、5歳児の親は「情緒的成熟」について、 $t=2.58(df=51)$ で2%水準で、男児への期待の方が有意に高かった。

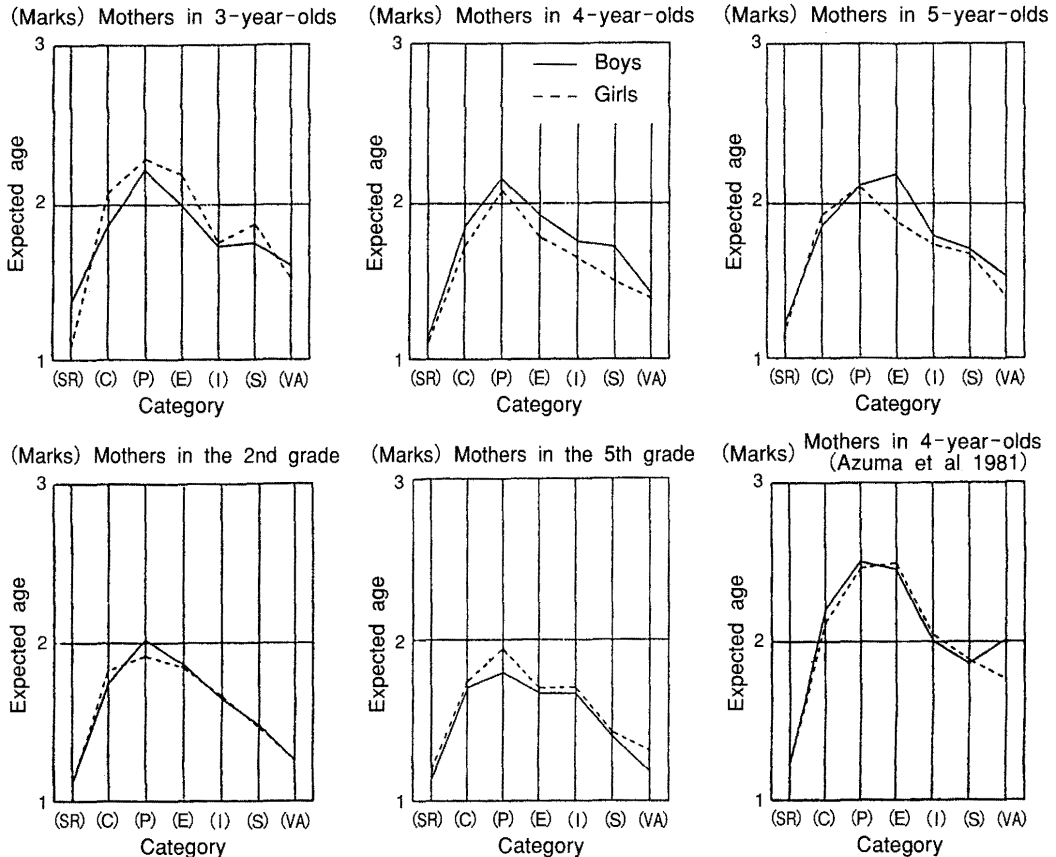


Fig. 4. Mothers' developmental expectation with gender and age of child.

俗に「1 姫 2 太郎」と言われるのは、最初は女兒の方が育てやすいからということであろうが、確かに生理学的にも女兒の方が育ちやすく、社会化の『文化的伝達』の側面においても、自己抑制力は3歳時点ですでに女兒の方が高く(柏木 1988)、「良い子アイデンティティ」は女兒に顕著である。また、思春期を男児よりも早く迎える女兒の方が、自己発現的問題解決、つまり社会化の『個人的学習』の側面においても男児よりも一歩早く、それが親の意識の中にも発達期待として表れるのではないだろうか。他方、男児は、4・5歳児期の活動性の高さ、それに伴うけんかを始めた他者との軋轢の多さから、「社会的スキル」や「情緒的成熟」への期待が女兒以上に高いのであろう。しかし、東ら(1981)に示された1974年のデータでは、性別による差はほとんどなく、「言語による自己主張」についてだけ、男児が高くなっているのが特徴的であった。本研究では、発達期待が全体的に低くなっており、また、性別による差も、子どもの年齢によりさまざまな様相をみせていることが分かった。今日、社会全体において性役割の意味が変化してきたことに伴い、子育てへの意識、発達期待も多様になりつつあることを示唆しているのかも知れない。

4. 子どもの出生順位と親の発達期待

「少なく産んで、賢く育てる」、十分な愛情と教育をかけて、といわれ、教育投資などという言葉も聞かれる現代である。しかし、大人に管理され続ける、貧しい子ども時代を指摘する声も聞かれる。出生順位、すなわちきょうだい関係と親の発達期待について分析してみた。その結果は、Fig. 5.に示す通りである。

4・5歳児の親についてみると、女兒には出生順位による差はほとんどないが、4歳男児の次子に対して発達期待が低く、5歳男児の一人っ子に対し、特に「学校スキル」や「社会的スキル」「言語による自己主張」への期待が高くなっている。第1子として長子には期待が大きい

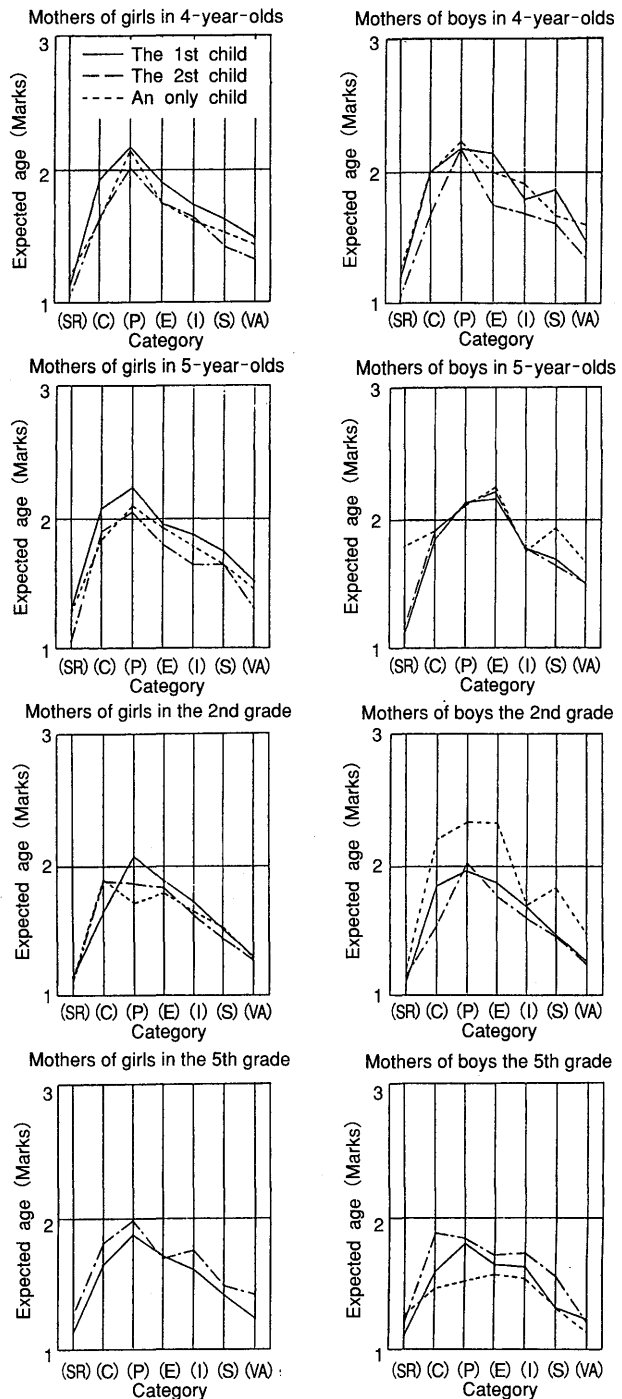


Fig. 5. Mothers' developmental expectation with gender, age and fraternal order.

だろうが、一人っ子への期待の懸け方は男女で異なるということであろうか。

2年生の親では、男児の一人っ子に対する期待が極めて高くなっている。「従順」「礼儀」「情緒的成熟」、そして「社会的スキル」「言語による自己主張」において、長子、次子との差が大きい。

ところが、5年生の親では、女兒の一人っ子は対象児が極めて少なく、データとしてあげられなかったが、男女児共に、長子よりも次子への期待が高くなっている。何かと目立たない存在であった次子が社会化における『個人的学習』の時期を迎えて、親の次子に対するもどかしい思い、また兄姉や弟妹にはさまれている次子の悪戦苦闘の思いを表しているのかも知れない。男児の親が「従順」を、女兒の親が「礼儀」を期待している次子である。これらの結果については、統計的有意差はなかったが、今後、さらに対象児を増やして調査を進めるつもりである。

子どもの発達には、子どもの他者への関わり方を規定し、また変化させるが、それと同時に、その子に対する他者の意識や行動をも変化させるのである。5年生の親の発達期待の変化は、小学校中・高学年に向けて、子ども達が大きく発達、変容してきたことを意味しているであろう。

結 論

今日の子どもの社会化に関する親の発達期待は、東ら(1981)に示された1974年のデータに比べ、各カテゴリー共、低くなっており、1974年の米国のデータに近い結果となった。日本の親の特徴とされた「社会的スキル」「言語による自己主張」への期待の低さはさらに顕著であること、子どもの年齢が低い程、親の発達期待は高くなっていることが分かった。しかし、重要度については、各カテゴリー間に差はなく、むしろ、子どもの年齢によって異なっていた。また、性別や出生順位についてみると、親の発達期待は、子どもの年齢ともかわりながら、多様な表れ方を示した。これらのことから、親の発達期待は、子どものそれぞれの時期における発達課題と広くかわりながら形成されていること、そしてこのことは、おとなと子どもが互いに関係的存在であることを示唆するものと考えられる。

<付記>本稿の内容は、第20回比較家族史学会(1991)、及び、第3回日本発達心理学会(1992)において発表した内容に加筆修正したものである。

引用文献

- 1) 東 洋・柏木恵子・R. D.ヘス:母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究, 東京大学出版会, (1981).
- 2) 柏木恵子:幼児期における「自己」の発達, 東京大学出版会, pp.17-43, (1988).
- 3) 岡本夏木:子どもとおとな, 岡本夏木・高橋恵子・藤永 保(編), 講座 幼児の生活と教育, 1 幼児教育とは, 岩波書店, pp.1-24, (1994).
- 4) 岡崎陽一:家族のゆくえ—人口動態の変化のなかで—, シリーズ人間の発達3, 東京大学出版会, (1990).
- 5) 斎藤耕二・菊地章夫(編著):社会化の心理学ハンドブック—人間形成と社会と文化—, 川島書店, (1990).
- 6) 田島信元:心の社会的構成論—発達への社会・文化的アプローチ—, 無藤 隆(編), 現代発達心理学入門, IV 発達における生活と文化の背景, ミネルヴァ書房, pp.222-239, (1993).
- 7) T. G. R. Bower: The Rational Infant —Learning in Infancy—, W. H. Freeman and Company, pp. 125-148, (1989).
- 8) 臼井 博:見えざる文化からの学び, 内田伸子・臼井 博・藤崎春代, 乳幼児の心理学, ベーシック現代心理学2, 有斐閣, pp.199-223, (1991).